

顔淵第十二

司馬牛問君子。

子曰、君子不憂不懼。

曰、不憂不懼、斯謂之君子已乎。

子曰、内省不疚、夫何憂何懼。

司馬牛、君子を問う。

子曰わく、君子は憂えず懼れず、と。

曰わく憂えず懼れざる、斯れ之れを君子と謂うか、と。

子曰わく、内に省みて疚しからずんば、

夫れ何をか憂え、何をか懼れん、と。

(12-283)

< 司馬牛、君子を問う >

Q : 「司馬牛、君子を問う」とは何ですか。

A : (1) 「門人の司馬牛が、君子とはどのような人物であるかと尋ねた」の意。

(2) 「司馬牛が君子とはいかなる者でしょうかと問うた」の意。

(3) 「司馬牛」とは、孔子の門人であったが、「多言にして操」、口が軽くて軽率なところがあつたらしい。孔子を殺そうとした司馬桓魋の弟。

< 子曰わく、君子は憂えず懼れず、と >

Q : 「子曰わく、君子は憂えず懼れず、と」とは何ですか。

A : (1) 「孔子は答えた。『何事にも憂えず、何事にも恐れぬのが君子である。』と」の意。

(2) 「『君子は心に心配ごともなく、おそれおののくことのない者である』と答えた」の意。

< 曰わく憂えず懼れざる、斯れ之れを君子と謂うか、と >

Q : 「曰わく憂えず懼れざる、斯れ之れを君子と謂うか、と」とは何ですか。

A : (1) 「さらに司馬牛は尋ねた。『それだけで君子と言えるか。』と」の意。

(2) 「司馬牛が、君子とはもっと高遠な者と思っていたのだろう。孔子の答えが余りにも卑近であるから、不思議に思って、人はただ憂えず懼れず、それだけで君子と言えましようかと再び質問した」の意。

< 子曰わく、内に省みて疚しからずんば、夫れ何をか憂え、何をか懼れん、と >

Q : 「子曰わく、内に省みて疚しからずんば、夫れ何をか憂え、何をか懼れん、と」とは何ですか。

A : (1) 「自分自身の心に、うしろ暗いものがなければ、何事をも憂えたり、恐れたりすることはないではないか。」との意。

(2) 「『もし人が自分に反省してみても、何もうしろ暗いことがないならば、その人は心配する

こともなかり、おそれることもない。かく顧みて少しもやましいことがないということは、君子でなくてはできぬことであるよ』と孔子は答えた」の意。

- (3) 「内省不疚」とは、自ら己の心に反省してみて病みなやむことがない。疚は病。気がとがめてなやみ苦しむこと。
- (4) 司馬牛の兄は悪人で、孔子を殺そうとしたり、宋で乱をなそうと企てていた。気の小さい司馬牛がこれを心配して常に憂え懼れていた。孔子は、この心情を察して、己に反省して、自分さえやましいことがなかったなら、りっぱな人で君子といえるといつて司馬牛を慰め、かつ、教えたかったのであろう。
- (5) 憂えず、懼れず、之を君子というのは、心の問題。